

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 17 号

2019（平成 31）年 4 月

聖心女子大学

は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、2019（平成31）年2月19日又は2019（平成31）年3月16日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目 次

氏 名	佐見 由紀子 (さみ ゆきこ)	19 頁
学位の種類	博士 (人間科学)	
学位記の番号	甲第 40 号	
学位授与年月日	2019 (平成 31) 年 3 月 16 日	
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当	
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科	
論文題目	保健教育における「罹患性」の自覚を高める教材の検討	

氏 名 佐見 由紀子 (さみ ゆきこ)

学位の種類 博士 (人間科学)

学位記の番号 甲第 40 号

学位授与年月日 2019 年 (平成 31) 年 3 月 16 日

学位授与の条件 聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当

審査研究科 聖心女子大学大学院文学研究科

論文題目 保健教育における「罹患性」の自覚を高める教材の検討

論文審査委員 (主査) 教 授 植田 誠治
(副査) 准教授 杉原 真晃
(副査) 教 授 高橋 浩之
(千葉大学 教育学部)

博士学位論文の要旨

今日、学校における保健教育ではさまざまな教材が開発されているものの、これまでの教材には「重大性」の自覚に比して「罹患性」の自覚を高めるものが不足していることが指摘されている。そこで、本研究は、中学校で学習する健康・安全の問題について「罹患性」の自覚を高める教材を開発し、その効果を検証することを目的とした。

研究1では、A中学校の2年生と3年生320名を対象に中学校で学習する8つの健康・安全の問題に対して、どの程度「罹患性」と「重大性」の自覚をもっているかについて質問紙調査を行った。その結果、「適応能力を超えた環境の健康への影響」、「交通事故による傷害」、「自然災害による傷害」、「二次災害による傷害」、「生活習慣病」、「喫煙・飲酒・薬物乱用による心身への影響」、「医薬品の使用による健康への影響」といった「欲求とストレスの心身への影響」を除く7つの内容では、「重大性」の自覚に比して、「罹患性」の自覚は高くなかった。さらに、2年生に比べ3年生では、「重大性」の自覚において、「医薬品の使用による健康への影響」、「交通事故による傷害」、「生活習慣病」で有意に高かったが、「罹患性」の自覚では有意な差は認められなかった。そのため、これら3つの内容については、「重大性」の自覚は学習や経験から自然に高まる可能性があるが、「罹患性」の自覚は従来の学習や経験では高まらない可能性があることが示唆された。

研究2では、中学生が「罹患性」の自覚を従来の学習や経験では高めにくいと考えられる3つの内容について「罹患性」の自覚を高める教材を開発し、その効果を検証した。「罹患性」の自覚を高める教材として、1) 自分の身近にいる人が疾病・症状や事故を体験した事例を読み、自分だったらどうするかを考える教材、2) 自分の体の中の状態をイメージしたり、生活の問題を把握したりできる疑似体験的教材を作成することとし、「医薬品の使用による健康への影響」、「交通事故による傷害」では1)を、「生活習慣病」では2)の教材を用いた。授業は、準実験計画研究デザインに基づき、A中学校の4クラスのうち、2クラス80名には「罹患性」の自覚を高める教材を用い、別の2クラス80名には従来から行われている教材を用いて行い、その効果を検証した。授業の効果は、主に、事前、事後、1～3ヵ月後に無記名自記式の質問紙調査を行い、意識の変化から分析した。分析は、Friedman検定、多重比較にはWilcoxonの符号付順位検定を用い、有意水準は5%以下とした。また、効果量の測定、及び感想文の質的分析も行った。

研究2-1では、A中学校3年生160名のうち、2クラス80名には、「医薬品の使用による健康への影響」において市販薬の副作用の「罹患性」の自覚を高めるために、1)に基づく事例教材を用い、別の2クラス80名には従来の教材を用いて授業を行った。この授業の効果は、事前、事後、3ヵ月後における副作用の「罹患性」の自覚3項目、副作用への意識3項目、副作用予防の自己効力感2項目の計8項目の意識の変化から分析した。その結果、副作用の「罹患性」の自覚の3項目である「自分も副作用で蕁麻疹が起きる可能性がある」、「自分にも副作用で失明する可能性がある」、「自分も副作用で死亡する可能性がある」、副作用への意識の3項目である「副作用で蕁麻疹が起きる」、「副作用で失明がする」、「副作用で死亡する」、副作用予防の自己効力感の2項目である「薬剤師に質問することができる」、「説明書を読むことができる」の全てにおいて、効果が認められた。

感想文では、事例教材により自分の体について深く考えた上で薬を使用することを意識した記述がみられた。一方、従来の教材を用いた授業では、副作用の「罹患性」の自覚には変化がなく、副作用への意識と自己効力感は、事前に比して事後に低下した。

研究2-2では、A中学校2年生160名のうち、2クラス80名には「交通事故による傷害」において交通事故の「当事者性」（交通事故については、「罹患性」という用語は適当ではないため、「当事者性」という用語を用いることとした）の自覚を高めるために、1)に基づく事例教材を用い、別の2クラス80名には従来の教材を用いて授業を行った。授業の効果は、事前、事後、1ヵ月後に、「当事者性」の自覚5項目、「重大性」の自覚5項目、事故防止行動意図5項目、事故防止自己効力感5項目の計20項目の意識の変化から分析した。その結果、「当事者性」の自覚の3項目である「自分が注意しないと事故にあう」、「自分が事故に今後あう」、「自分が今すぐ事故にあう」、「重大性」の自覚の4項目である「命にかかわる」、「苦痛を伴う」、「大きな問題ではない」、「今までの生活が送れない」、事故防止行動意図の5項目全てである「心の状態に気をつけたい」、「危険な行動に気をつけたい」、「危険な場所に気をつけたい」、「気をつける必要はない」、「交通ルールを守りたい」、事故防止自己効力感の3項目である「心の状態に気をつけることができる」、「交通ルールを守ることができる」、「気をつけることができない」において授業の効果が認められた。さらに、感想文では、事例教材から自分も事故にあう可能性があるという「当事者性」の自覚をもったと判断できる記述がみられた。一方、従来の教材を用いた授業後でも、「当事者性」の自覚、事故防止行動意図、事故防止自己効力感では同様の結果であった。しかし、「重大性」の自覚では1項目のみでしか効果が認められなかった。

研究2-3では、A中学校3年生160名のうち、2クラス80名には「生活習慣病」において生活習慣病の「罹患性」の自覚を高めるために、2)に基づく血圧測定と思春期用チェックリストによる疑似体験的教材を用い、別の2クラス80名には従来の教材を用いて授業を行った。授業の効果は、事前、事後、1ヵ月後の「罹患性」の自覚5項目、「重大性」の自覚5項目、生活習慣病予防行動意図5項目、生活習慣病予防自己効力感5項目の4つの意識に関する計20項目の意識の変化から分析した。その結果、授業の主要なねらいである「罹患性」の自覚における「生活習慣病は自分に身近である」の1項目に加え、「重大性」の自覚の1項目である「命にかかわる」、予防自己効力感の1項目である「生活習慣に気をつけることができない」では授業の効果が認められた。さらに、感想文では、血圧測定や思春期チェックリストから、自分と生活習慣病との関係性の実感に関わる記述がみられた。一方、従来の教材を用いた授業では、効果の認められた項目はなかった。

以上、3つの授業の検討結果から、「罹患性」の自覚を高めるためには、市販薬の副作用や交通事故のように中学生が今すぐにあう可能性のある問題に対しては、身近な人物の事例教材を用いることに一定の効果があることが明らかとなった。また、生活習慣病という中学生が今すぐあう可能性が低い問題では、血圧測定や思春期チェックリストによる疑似体験的教材を用いることに、身近さを感じさせるという点で一定の効果があることが明らかとなった。その一方で、「罹患性」の自覚を高める教材に関して、事例を単に用いるのみではなく、それをどう個人で引き取り考えたかを共有する工夫、疑似体験するだけではなく、その前後で思考を促す工夫、予防自己効力感の自覚の持続の困難さ、生活習慣病については予防行動意図や予防自己効力感を高める工夫といった課題が明らかとなった。

Development of Teaching Materials That Enhance Perceived “Susceptibility” to Health or Safety Problems in School Health Education

Abstract

The purpose of this study was to develop junior high school teaching materials that enhance perceived “susceptibility” to health or safety problems, and examine the effectiveness of such teaching materials.

In study 1, we identified and evaluated eighth and ninth graders’ perception of “severity” of and “susceptibility” to eight health or safety problems that were the contents of health education in a junior high school. We found that the percentage of students’ responding about the perceived “severity” of and “susceptibility” to *Influence of frustration and stress on mind and body* was high. However, for the other seven items were as follows; *Impact on health in environments beyond adaptive capacity, Traffic accidents, Natural disasters, Secondary disasters, Lifestyle-related diseases, Influence of smoking, drinking, and drug abuse on mind and body, and Effects of medicines*, the percentage of students’ responding about the perceived “severity” was high, while the percentage of students’ responding about the perceived “susceptibility” was low. Furthermore, the ninth graders rated significantly higher than the eighth graders in the perception of “severity” regarding *Effects of medicines, Traffic accidents, and Lifestyle-related diseases*, however, in the perception of “susceptibility,” the ninth graders rated did not significantly higher than the eighth graders regarding these three contents. This indicates that the perceived “susceptibility” does not increase sufficiently from eighth grade to ninth grade through standard junior high school health instruction or experience.

In study 2, we developed teaching materials for three contents that do not increase sufficiently through standard junior high school health instruction or experience. We developed two teaching materials as follows: 1) case-based and, 2) simulated experience to enhance students’ perception of “susceptibility.” Then, we developed teaching materials that used 1) case-based for adverse reactions to over-the-counter drugs and *Traffic accidents* and 2) simulated experience for *Lifestyle-related diseases*. Participants were 160 ninth graders from four classes in a junior high school. We assigned the students to two groups of two classes each based on a quasi-experimental design. With 80 students of two classes: experimental group, we conducted health classes focused on the perceived “susceptibility” of problems. With 80 students of the other two classes: control group, we conducted health classes used existing teaching materials.

In study 2-1, we developed the teaching materials to enhance students’ perception of “susceptibility” to adverse reactions to over-the-counter drugs as *Effects of medicines*. For two classes of the experimental group, we conducted health classes using case-based teaching materials that focused on the perceived “susceptibility” to adverse reactions. It was found that in the experimental group, all three items regarding perceived “susceptibility,” all three items

regarding the consciousness of adverse reactions, and both items regarding students' self-efficacy for the prevention of adverse reactions became significantly higher.

In study 2-2, we developed the teaching materials to enhance students' perception of *Traffic accidents* as their own problem in junior high school. Participants and grouping were the same as that in study 2-1. For two classes of the experimental group, we conducted health classes using case-based teaching materials that focused on their perception of traffic accidents as their own problem. We found that in the experimental group, three items regarding the perception of traffic accidents as their own problem, four items regarding perceived "severity," all five items of regarding the intention to prevent traffic accidents, and three items regarding their self-efficacy about traffic accidents became significantly higher.

In study 2-3, we developed the teaching materials to enhance students' perception of "susceptibility" to *Lifestyle-related diseases*. Participants and grouping were the same as that in study 2-1. We conducted health classes using simulated experience teaching materials that used blood pressure measurement and the life check list for puberty, focusing on students' perception of "susceptibility." We found that in the experimental group, one item regarding perceived "susceptibility," became significantly higher. In other words, these materials were effective to raise their consciousness on this topic. Furthermore, one item regarding the perceived "severity," and one item regarding their self-efficacy about the prevention of *Lifestyle-related diseases* became significantly higher.

These results suggest that following the teaching materials for junior high school health education are effective to enhance students' perceived "susceptibility" to health or safety problems. Regarding perceived "susceptibility" to adverse reactions to over-the-counter drugs and *Traffic accidents*, case-based teaching materials are effective. Furthermore, regarding *Lifestyle-related diseases* prevention, there is a constant effect to enhance students' perceived "susceptibility" in using simulated experience teaching materials.

On the other hand, regarding teaching materials that enhance students' perceived "susceptibility," it is important to not only use cases but also share how the case can be addressed appropriately, and not only simulate experiences but also devise ideas. In addition, the difficulty of sustaining of preventive self-efficacy about three contents was also revealed.

学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 佐見 由紀子

論文題目 保健教育における「罹患性」の自覚を高める教材の検討

審査委員 主査：植田 誠治

副査：杉原 真晃

副査：高橋 浩之（千葉大学教育学部）

1. 論文の要旨

本論文の目的は、中学校の保健教育において、「罹患性」の自覚を高める教材を開発し、その効果を検証することにある。保健教育は、児童生徒が生涯を通じて健康・安全で豊かな生活を送るうえでの基礎を培うものであり、様々な保健行動理論に基づく教材開発が進められてきている。適切な保健行動には、自分が病気に罹患したり事故に遭ったりした際の「重大性」の自覚とともに、病気や事故に対する「罹患性」の自覚、すなわち自分自身が病気に罹患したり事故に遭ったりする可能性の自覚が必要であるとされるが、保健教育においては、「重大性」の自覚を高める教材に比して「罹患性」の自覚を高める教材が不足していることが課題となっていた。そこで、本論文では、中学生の健康・安全の問題に対する「罹患性」の実態を明らかにしたうえで、「罹患性」を高めることが必要と思われる内容を取り上げ、それぞれに教材を作成し、授業を行い、その効果を検証している。

研究1では、中学生における健康・安全の問題に対する「罹患性」の実態を明らかにしている。A中学校320名を対象とする質問紙調査を実施し、中学校で学習する8つの内容の健康・安全の問題に対する「罹患性」と「重大性」の自覚の実態を明らかにした。その結果、「適応能力を超えた環境の健康への影響」、「交通事故による傷害」、「自然災害による傷害」、「二次災害による傷害」、「生活習慣病」、「喫煙・飲酒・薬物乱用による心身への影響」、「医薬品の使用による健康への影響」といった「欲求とストレスの心身への影響」を除く7つの内容では、「重大性」の自覚に比して「罹患性」の自覚は高くないことが明らかとなった。さらに、「医薬品の使用による健康への影響」、「交通事故による傷害」、「生活習慣病」の3つの内容において、「重大性」の自覚については、学習や経験によって自然に高まる可能性が指摘できたが、これらの問題に対する「罹患性」の自覚は、従来の学習や経験では十分に高まらない可能性があることが示唆された。

研究2では、中学生が「罹患性」の自覚を従来の学習や経験では高めにくいと考えられる「医薬品の使用による健康への影響」、「交通事故による傷害」、「生活習慣病」の3つの内容の健康・安全の問題について、「罹患性」の自覚を高める教材を作成し効果を検証した。「罹患性」の自覚を高める教材として、1) 自分の身近にいる人が疾病・症状や事故を体験した事例を読み、自分だったらどうするかを考える教材、2) 自分の体の中の状態をイメージしたり、生活の問題を把握したりできる疑似体験的教材を作成することとし、「医薬品の使用による健康への影響」、「交通事故による傷害」では1)を、「生活習慣病」では2)を用いた。授業は、準実験計画研究デザインに基づき、A中学校の4クラスのうち、2クラス80名には「罹患性」の自覚を高める教材を用い、別の2クラス80名には従来か

ら行われている授業の教材を用いて行い、その効果を検証した。授業の効果は、主に、事前、事後、1～3ヵ月後に無記名自記式の質問紙調査を行い、意識の変化から分析した。分析は、Friedman 検定、多重比較には Wilcoxon の符号付順位検定、効果量の測定、及び感想文の質的分析を用いて行われた。

研究 2-1 では、A 中学校 3 年生 160 名のうち 2 クラス 80 名を対象に、「医薬品の使用による健康への影響」において、市販薬の副作用の「罹患性」の自覚を高めるために、1) に基づく身近な人物が市販薬の副作用にあった事例教材を用いて授業を行った。授業の効果は、事前、事後、3ヵ月後における副作用の「罹患性」の自覚 3 項目、副作用への意識 3 項目、副作用予防の自己効力感 2 項目、計 8 項目の意識の変化から分析し、8 項目全てに効果が認められた。また感想文より、身近な人物が市販薬の副作用にあった事例教材により、自分の体について深く考えた上での薬の使用を意識した記述が多数みられた。

研究 2-2 では、A 中学校 2 年生 160 名のうち 2 クラス 80 名を対象に、「交通事故による傷害」において、交通事故の「当事者性」（交通事故については「罹患性」という用語は適当でないため「当事者性」という用語を用いている）の自覚を高めるために、1) に基づく身近な人物が交通事故にあった事例教材を用いて授業を行った。授業の効果は、事前、事後、1ヵ月後における「当事者性」の自覚 5 項目、「重大性」の自覚 5 項目、事故防止行動意図 5 項目、事故防止自己効力感 5 項目、計 20 項目の意識の変化から分析した。その結果、「当事者性」の自覚における 3 項目で効果が認められた。また、「重大性」の自覚の 4 項目、事故防止行動意図の 5 項目全て、事故防止自己効力感の 3 項目でも効果が認められた。さらに感想文より、事例教材を用いた授業では、自分にも起こる可能性があるとする「当事者性」の自覚に関連する記述が多数みられた。

研究 2-3 では、A 中学校 3 年生 160 名のうち 2 クラス 80 名を対象に、「生活習慣病」において、生活習慣病の「罹患性」の自覚を高めるために、2) に基づく血圧測定と生活習慣病の中学生向けチェックリストによる体の中をイメージしたり生活の問題を把握したりできる疑似体験的教材を用いて授業を行った。授業の効果は、事前、事後、1ヵ月後における「罹患性」の自覚 5 項目、「重大性」の自覚 5 項目、生活習慣病予防行動意図 5 項目、生活習慣病予防自己効力感 5 項目、計 20 項目の意識の変化から分析し、授業の主要なねらいである「罹患性」の自覚における「生活習慣病は自分に身近である」の項目では効果が認められた。また、「重大性」の自覚の 1 項目、予防自己効力感の 1 項目でも効果が認められた。さらに感想文より、疑似体験教材を用いた授業では、自分との関係性の実感の記述が多数みられた。

以上、3つの教材を用いた授業の検討結果から、「罹患性」の自覚を高めるためには、市販薬の副作用や交通事故のように、中学生が今すぐ遭う可能性がある問題に対しては、身近な人物の事例教材を用いることに一定の効果があることが明らかとなった。そして、生活習慣病という、中学生が今すぐ遭う可能性が低い問題では、血圧測定と生活習慣病の中学生向けチェックリストによる体の中をイメージしたり生活の問題を把握したりできる疑似体験的教材を用いることに、身近さを感じさせるという点で一定の効果があることが明らかとなった。その一方で、「罹患性」の自覚を高める教材に関して、事例を単に用いるのみではなくそれをどう個人で引き取り考えたかを共有する工夫、疑似体験するだけでなくその前後で思考を促す工夫、予防自己効力感の持続の困難さ、生活習慣病について

は予防行動意図や予防行動自己効力感を高める工夫といった課題が明らかとなった。

2. 本論文の評価

本論文は、健康教育において重要であるにもかかわらず、学校における健康教育の一つである保健教育において、それを高める教材開発が不足していた「罹患性」の自覚という概念に焦点を当てたところに特徴がある。中学生を対象とする質問紙調査により、保健教育において取り上げられる健康・安全の問題の多くの「罹患性」の自覚が低いことを実証的に明らかにしたこと、さらにその結果に基づき「医薬品の使用による健康への影響」、「交通事故による傷害」、「生活習慣病」の3つの内容において、身近な人物の事例教材や疑似体験的教材を用いた授業が「罹患性」の自覚を高めるに有効であるという有益な示唆が得られたことは高く評価できる。

また教育効果という難しい指標に対して、中学校における実際の授業を用い、倫理的配慮を丁寧に行いながら、明確な研究デザインに基づいて研究が遂行された点、可能な部分についてはノンパラメトリックな検定を用い、さらに生徒の感想文に質的な分析を加えているといった点も評価できる。対象とした中学生は限定された中学校の生徒であることや授業が通常の教育課程の中で実施されたといった方法論上の限界により、得られた結果を直ちに一般化することは出来ないが、本論文で得られた知見は、今後の保健教育教材を開発する際の参考となり、その活用が大いに期待できる。

なお、本論文を構成する研究について、研究1は「中学校保健学習における健康・安全の問題に対する「重大性」と「罹患性」の自覚の実態」(学校保健研究, 2018, 60 (3), 51-59)、研究2-1は「市販薬の使用における副作用の「罹患性」の自覚を高める保健の授業」(日本健康教育学会誌, 2017, 25 (4), 269-279)、研究2-2は「中学校保健の授業における交通事故の「当事者性」の自覚を高める教材開発と評価」(保健科教育研究, 2018, 3, 2-11)、研究2-3は「生活習慣病の「罹患性」の自覚を高める保健の授業」(日本健康教育学会誌, 2019, 27 (1), 52-63)として、査読付き学術雑誌に掲載され外部評価を受けた。また、先行研究は「保健教育における「罹患性」の自覚を高める教材開発の意義」(聖心女子大学大学院論集, 2018, 40 (2), 28-43)として掲載されている。

3. 本論文の審査の過程

本論文は平成30年10月26日に提出された。同年11月2日に学長より審査の付託がなされ、11月13日に大学院委員会了承による3名からなる審査委員会が審査を開始した。

12月14日に第1回審査会が開かれ、本論文が、「罹患性」の自覚という重要な概念に焦点を当てて、教材の開発と評価に真正面から取り組んだ研究であり、健康教育学的な価値の高さから、博士学位論文として認められるものであることが確認された。ただし、表の記述が視覚的に捉えづらいことや論理展開の不明確なところがあることについて、修正の必要性が指摘された。これらの指摘に基づく修正稿により、平成31年1月10日に第2回審査委員会が開かれ、指摘された点が的確に修正されていることを確認した。平成31年2月6日に、学位申請論文公開審査会および最終試験が実施され、質疑に対する的確な応答がなされた。

以上により、審査委員会は、本論文が学位論文にふさわしいものであることを確認した。

博士学位論文
内容の要旨および審査結果の要旨
第17号

2019（平成31）年4月25日発行

発行 聖心女子大学大学院
編集 聖心女子大学大学院
〒150-8938
東京都渋谷区広尾4-3-1
電話 03-3407-5811（代表）